

## 2019年度 静岡県言語聴覚士会 全体研修会 開催

2020年1月26(日)に、静岡県男女共同参画センターあざれあ第一研修室にて、2019年度 静岡県言語聴覚士会全体研修会を実施しました。

### 9:45～10:45 「STの新しい職域～児童発達支援事業所」

発表者：NPO 法人アンヘレス天使の部屋 内山 由基

進行役：富士市立こども療育センター 平野 初美

はじめに、児童発達支援事業所と発達支援センターの違い・相談支援事業所がサービス利用計画を作成した上で、市の社会福祉課が受給者証を発行して始めて施設が利用できる、といった法的根拠に基づいた手続きについてお話しして下さいました。児童発達支援事業所には週1～2回1時間の利用という所もありますが、「天使の部屋」は、週5日子どものみの単独通園で、9～15時まで利用でき、20名定員で年少以下の子ども・肢体不自由児2名も利用されているそうです。発達レベルは比較的軽度な子が多いけれど、外国籍のお子さんや貧困・親のネグレクトなど養育環境に心配のある家庭が多く、家庭支援について、



悩みを持ちながら療育を実施しているそうです。年長・年中児に実施する言語能力別活動の実施や発達評価・現在1名に実施している個別指導の実施・保護者や職員への対応といったSTとしての業務内容に加え、クラス担任の仕事・個別支援計画作成やモニタリングや利用契約といった事業所の事務・職員向け勉強会の実施・環境の工夫や視覚支援の活用といった児童発達支援事業所ならではのその他の業務について具体的に教えて下さいました。質疑応答では、発表者から現在の課題として提起された養育環境に心配のある家庭の保護者支援に対しては、行政の保健師や子供の養育や虐待を扱う部署との連携を行うこと・保育士や経験知識が異なる支援員、外国籍の保護者でもわかりやすい発達評価方法については、「こどものコミュニケーションチェックリスト」や現在実施しているKIDSを現場での子供の様子を見て実施する、という方法でよいという助言がありました。また、経験・知識の差が大きい職員間の知識や情報共有の課題については、共通の視点を持つことも大切だが、各職種独自の視点を生かし多方向から子供の発達をとらえていける長所を生かすことが提案されました。



### アンケートの感想

- ・小児分野におけるSTの役割は多岐にわたるが、その中で就学前にできることや考慮すべき問題が明確になり、自らの業務を見直すきっかけになった
- ・自分も児童発達支援事業所の業務にかかわっているので、他の施設の様子を知ることができてよかった。
- ・小児も地域での生活が重視されているので、今回の発表の事業所のように丁寧に療育してもらえると嬉しいところが増えるといい。
- ・小児領域以外の会員に児童発達支援事業や小児の福祉分野について知ってもらえる機会になった。
- ・発表者の丁寧なかかわりが伝わってきた。・小児について知識を得ることができた。
- ・ディスカッションの内容が、具体的でよかった。
- ・発表者の人柄がよく、話がとてもわかりやすかった。

10:55～11:55「脳梗塞を発症後に運動障害性構音障害を呈し、学習の汎化に難渋した症例」

発表者：天竜すずかけ病院

伊藤 千紗

進行役：浜松市リハビリテーション病院 岡本 圭史

アテローム血栓性脳梗塞により右片麻痺、構音障害、遂行機能障害、自発性の低下、注意障害を呈した自閉症スペクトラムの疑いもある60代男性の症例検討を行いました。初回評価後の問題点として、上記のほかに声量低下・プロソディー障害・氣息性嘔声・口腔機能低下・構音の歪みがあり、レポート形成・遂行機能・注意機能向上・声量増大・発話明瞭度の向上を短期目標とした訓練を実施し、退院時には、すべての音で明瞭度が改善し発話明瞭度が3～4だったのが2に変化したものの、声かけに無反応な時もあり、なかなか構音に関する自己修正がみられないことに対し、悩みながら訓練を実施してきた経過が発表されました。また、入院後5か月目に実施した外泊から帰ってきてから、現実が見えてきたのか、発話量が増え、本人の発言が変わってきたことも報告されました。発表者からは、運動障害性構音障害について学習の汎化に難渋したこと・機能障害の程度に比しコミュニケーションの疎通性が低下し訓練介入に難渋したことに対し、対応方法に関する助言の希望がありました。



質疑応答では、本症例について運動障害性構音障害として発表されているが、失語症状はなかったか、失語症状が心理的な状況につながる場合もある、という意見が出ました。発表者からも、初回評価で、失語症に関する評価も丁寧にすべきだったと返答がありました。また、「汎化に難渋した」と思うのは「周囲との円滑なコミュニケーションを図ることができる」という長期目標設定そのものが、本人に合っていたのか・本人がまじめに訓練に参加できており、「今のお話しはすごくよくわかりましたよ」とよくできている所を患者さん本人にフィードバックしていくことも大切、という助言も出ていました。評価・訓練方法に関する助言としては、フリートークを録音しておくことと本人の状態が正しく把握できる・明瞭度低下の原因や問題背景についてST単独でなくリハチーム全体で分析しあうことで訓練選択の順番が変わってくること・声量低下があったので「声を大きくするアプローチ」が有効であること・本人が好きな畑仕事の話題を利用することなどが、出ていました。

質疑応答では、本症例について運動障害性構音障害として発表されているが、失語症状はなかったか、失語症状が心理的な状況につながる場合もある、という意見が出ました。発表者からも、初回評価で、失語症



に関する評価も丁寧にすべきだったと返答がありました。また、「汎化に難渋した」と思うのは「周囲との円滑なコミュニケーションを図ることができる」という長期目標設定そのものが、本人に合っていたのか・本人がまじめに訓練に参加できており、「今のお話しはすごくよくわかりましたよ」とよくできている所を患者さん本人にフィードバックしていくことも大切、という助言も出ていました。評価・訓練方法に関する助言としては、フリートークを録音しておくことと本人の状態が正しく把握できる・明瞭度低下の原因や問題背景についてST単独でなくリハチーム全体で分析しあうことで訓練選択の順番が変わってくること・声量低下があったので「声を大きくするアプローチ」が有効であること・本人が好きな畑仕事の話題を利用することなどが、出ていました。

アンケートの感想

- ・自己フィードバックの汎化の促し方、コミュニケーションの疎通性が低下している方に対する介入方法について、意見を聞くことができてよかった。
- ・深く考察されており、参考になった
- ・若い方がきっちり臨床されていて、驚きました。

12:55～13:55 「気管カニューレを変更した後、経口摂取困難となった一例」

発表者：湖山リハビリテーション病院 鈴木 希未

進行役：浜松市リハビリテーション病院 北條 京子

療養型病棟に移った当初はコーケンネオプレス単管タイプ・複管タイプの気管カニューレを装着し、平日昼食のみ経口摂取ができていたが、気管孔全体に肉芽が増生したため療養型病棟入院 3 か月後にコーケンのティチューブにカニューレを交換したところ、経口摂取が全面中止となった 50 代男性の症例検討を行いました。経口摂取中止後、間接嚥下訓練を週 2～3 回実施しながら気管カニューレの検討や経口摂取再開の可能性を探り、コーケン社のレティナ試行の提案をしたものの、挿入できる医師がいないため実施できず、誤嚥防止術の実施も検討したが、こちらも実施できなかったそうです。そのため、現在は経口摂取中止から 1 年が経過するが、口腔機能・嚥下機能維持を図るための間接嚥下訓練を行う際に、本人がワイン好きだったことからワイン風味のブドウジュースで作成したアイス棒



を用いて、本人およびご家族の満足感を得る工夫をしながら、気管カニューレ変更が可能となった時に備えているそうです。考察では気管カニューレの変更で経口摂取困難となった理由として、ティチューブによって声門下圧が保持しにくくなったこと・気管カニューレの再変更には肉芽の完全消失が条件となるが、現状では、肉芽消失のめどがたらず難しいこと・生活の場である療養型病棟の ST の役割として、お楽しみレベルでも味を感じる関わりをすることで、本人の QOL 向上を考えていくこと、という意見が発表されました。

質問応答では、本症例に対して、とても考えた臨床が行われている、という意見が、複数出ていました。カニューレ変更の余地は肉芽の状態次第であること・スピーチバルブを付けて声門下圧を上げた状態で嚥下評価してみること・カフを入れていた方が気管内壁の刺激を減らせる場合もあること・誤嚥防止術の適応が妥当と思われることなど、活発な意見交換がありました。また、訓練や手術の選択をする際、「臨床倫理の 4 原則」にのっとり、「本人が元気な状態だったら、どんな選択をしたか」という「本人の推定意思を尊重する」ことも提案されました。経口摂取中止となった時の VF 実施による摂食評価実施や経口摂取中止後の誤嚥性肺炎の有無・経口摂取中止となったむせの状態なども質問されていました。

アンケートの感想

- ・療養型病院ならではの苦労や長期の経過を聞くことができ、勉強になった。
- ・療養型病棟で、他職種を巻き込んで、患者さんの QOL を高められるような介入を行いたいと思った。
- ・気切の患者さんを担当する機会は少ないため、カニューレの種類・手術について他院 ST の意見を聞くことができ勉強になった。
- ・症例の評価・提案がすばらしかった。ST としてできることを提案していく重要性を感じた。

### 14:05～15:05「失語症者向け意思疎通支援者養成事業報告」

発表者：坂の上ファミリークリニック

金田 英理

進行役：介護老人保健施設 ひなたぼっこ

坂本 恵子

失語症の支援者となることを希望する人を一般から募集し、講座を受講した後、県に登録してもらい、外出同行などに有償で派遣する人材を養成する失語症者向け意思疎通支援者養成事業について、報告していただきました。本事業が国から日本言語聴覚士協会が委託され、各都道府県で準備が始まった流れ・2018年度からの県内での準備・2019年度から開始された浜松市在住・在勤の参加希望者20名を対象とした6月～12月まで月1回実施した講義や外出動向支援演習の運営方法や具体的な内容・本養成事業の意義や参加スタッフの成長などが報告されました。静岡県は、会話パートナー事業を実施していた経験



が、本事業を早い段階で立ち上げることができた大きな要因になっているそうです。また、失語症者のコミュニケーション特性や失語症者にも様々なタイプがあり、その方の言いたいことや思いをくみ取っていく大切さを受講者に伝えていくことで、失語症者を理解してもらえる人材を増やす事業の本来の主旨だけでなく、22名の事業運営協力スタッフであるSTにとっても在宅の失語症者の様子やコミュニケーションについて学ぶことができ、ロールプレーを考

えること・受講者に教えることでST自身の成長となること、協力者となって下さった失語症当事者も、「自分が役に立ち、謝礼までもらえたこと」に有用感をもってもらえたこと・家族が、当事者が家族以外の人と話すことで生き生きし、外出したいという意欲を持たせたことに喜びを感じて下さったことなど、多くの意義がある事業ということが、発表されました。本事業は、令和2年度は中部地区での開催を予定しており、協力して下さるスタッフを募集しています。会員の皆さんには、積極的な参加をお願いしたいそうです。また、今後、令和2年度に派遣要項の作成を行い、令和3年度の派遣事業開始を目指していくそうです。

#### アンケートの感想

- ・詳細を聞いてよかった。色々な人の声や実際の写真があって興味がわいた。
- ・日々の業務と並行して、このような事業が展開されていると知り、勉強になった。
- ・立ち上げから現在までの経過報告をきき、すごいと思った。
- ・可能な範囲で協力していきたい。
- ・事業の課題や対応について、今後の活動にいかしていけるとよい。
- ・事業のイメージを持つことができた。
- ・事業の成果をきき、感動した。
- ・今後の事業展開に期待したい
- ・実際にスタッフとして参加して、自己の喜びにもなり、失語症の方が社会への関わりを広げられる可能性を感じた。
- ・中部地区実施の事業に参加しようと思っていたので、不明な点がわかってよかった。

#### アンケートの感想 (研修全体)

- ・自分の職場とは違う分野の発表を聞くことができ、良い経験になった。
- ・症例報告は ST の立場からさまざまな視点で評価・検討されていて勉強になった。
- ・各発表とも、とても勉強になる内容だった。
- ・質問や意見が多く出ていて、参考になった。
- ・自分以外の ST も迷ったり困りながら仕事をしていることを知り、安心した。

#### アンケート (改善した方がよいと思うこと)

- ・発表分野に偏りがある
- ・毎回案内がタイトルのみで、内容を推測する必要があるため、抄録があると、イメージしやすく、参加者が増えるかもしれない。
- ・発表内容がよいので、もう少し参加者が増えるようにしてほしい。
- ・近くに飲食店がある会場がよい
- ・新人が質問することがなかったので、指名してでも、若手が質問するタイミングがあるとよい←進行役には会員番号が入っている参加者リストをお渡ししており、若手にも発言をうながすよう、お願いしております。今回は、フロアからの質問が多かったため、若手に質問をうながす時間が足りなかったようです。

#### アンケート (希望する研修テーマ・講師)

- ・訪問・生活期での ST 業務や症例検討
- ・地域ケア会議の参加報告
- ・ボバース法
- ・嚥下評価
- ・失語や構音障害の検査の進め方と解釈
- ・県士会所属 ST がどこで働いていて何を専門としているか、発表しあう
- ・認知症・高次脳機能障害
- ・看取りでの ST のかわり